

伊勢湾の複合型藻類養殖技術開発事業

山田大貴・清水康弘・倉田恵吉

目的

伊勢湾では、様々な種類の漁業が営まれているが、漁場環境の悪化、魚価の下落や経営コストの上昇などによって漁業を取り巻く環境は厳しさを増しており、経営を安定させるためには、単一漁業種類だけでなく複合的な経営（複数の漁業種類を営む）によって収入を確保していく「不漁リスク分散型漁業」への取組みが重要な課題となっている。

ヒトエグサ養殖は、伊勢湾で営まれている他の漁業（黒ノリ養殖業・機船船びき網漁業・小型機船底びき網漁業）に比べて比較的、設備投資や加工経費を安価に抑えることができる（陸上加工設備は黒ノリ養殖の約 1/4 程度の初期投資で済む）。そのため、ヒトエグサ養殖と他の漁業との複合的な経営を行うことで不漁リスクの分散が図られると考えられる。

本事業では、伊勢湾においてヒトエグサ養殖の主な生産地である松阪地区以外の海域でのヒトエグサ養殖適地の探索および当該地区でのヒトエグサ養殖を導入した場合の経営分析などを行った。

方法

1 モデル地区の設定とヒトエグサ養殖試験

ヒトエグサ試験養殖のモデル地区として伊勢市江地区を選定した。伊勢市地区では、主に採貝漁業が営まれているが、近年のアサリ資源減少のため、ヒトエグサ試験養殖を開始することとなった。試験漁場においては、養殖試験に併せて試験網に水温ロガー（Onset 社）を設置し、連続観測を実施した。

江地区で養殖試験に用いた種網は、天然採苗された後、葉長数 cm まで育苗された鳥羽市産 20 枚を用いた（平成 30 年 11 月 11 日試験開始）。その後、生育状況を生産者および地区担当水産業普及指導員と確認した。

2 モデル地区における経営分析

養殖試験で生産した製品の評価は、あおのり共販の共販結果を使用した。また、養殖に必要な経費については養殖試験参加者から聞き取りを行った。

結果と考察

1 モデル地区の設定とヒトエグサ養殖試験

江地区では養殖試験開始後、12 月までに葉長 6cm 程度まで伸長が確認された。その後も目立った障害もなく順調に生育し、摘採は 1 月上旬以降に複数回行われた。

試験中の温度環境においては図 1 のとおりであった。

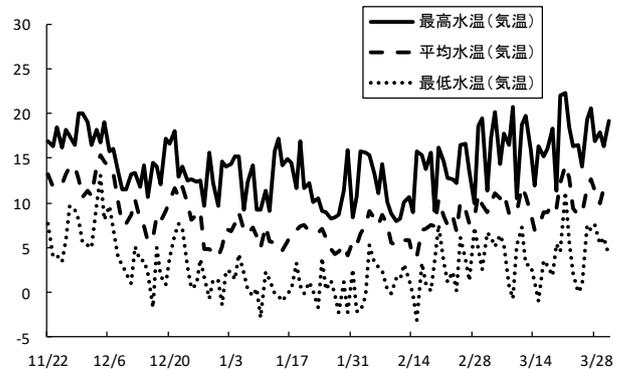


図 1. 江地区のヒトエグサ漁場の水温、気温

生産された製品について、青さのり共販で入札が行われた結果、3 月 30 日時点では生産数量 44kg、最高単価 3,800 円/kg、平均単価 2,287 円/kg（県内平均 3,939 円/kg）となった。製品の単価が県内平均を下回った原因については、今年度は黒潮の大蛇行の影響により潮位が高い状態が続き干出不足となったことにより製品の品質が低下したのではないかと考えられる。しかしながら、江地区の製品は製品の色彩が深緑色であることから、今後生産される製品が高品質な製品となる可能性があることが分かった。

2 モデル地区における経営分析

今漁期において、江地区で聞き取った経費と、伊勢湾地区における網 1 枚あたりの平均生産金額から費用対効果を検証したところ、人件費を含めない場合、4 枚以上の規模であれば収益が見込めると推計された。今後、加工技術や養殖技術の向上により江地区でさらに高品質な製品が生産されるようになると、高い費用対効果を示すと考えられる。